

希望はわたしたちを欺くことはありません。
わたしたちに与えられた聖霊によって、
神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

(ローマの信徒への手紙 5章5節)

**「はじめに夢があった。教会の中に夢があった。
教会の環境に於いて教育ができたらどんなによいだろうと、
何人もの先輩がこの夢を懐きつつ、どれも実現しないで天に召されていった。」**

これは1951年4月6日、清教学園中学校開校式での初代理事長橋本通先生(日本基督教団河内長野教会牧師)の式辞の一部です。この式辞については以前この「キリスト今月の聖句」でご紹介しました。この文章には続きがありません。

「たまたま1947(昭和22)年の暮れ頃、この夢がまたも教会員の胸によみがえった。終戦後の混乱と道徳の擦乱は、この夢の実現を一層刺激した。しかし、いざ実現となると小さい教会の容易に手の出せる問題ではなかった。」

人が「夢」を持ち、それを実現するためには、いろいろと必要なものがあると思います。その一つが「情熱」というものでしょう。「夢」の実現が困難であればあるほど、「内に秘めたる情熱」というものが必要になってくると思います。では、その「情熱」は何によって支えられているのでしょうか。それは「希望」というものに支えられているのかもしれない。「夢」が実現するというしっかりとした確信を持った時、「情熱」が自分の内から湧き出てきます。その確信に基づいた情熱こそが、困難な壁を乗り越える力の源となるでしょう。

清教学園の歴史を紐解いてみると、この「確信に基づいた情熱」があちらこちらで見ることができます。清教塾に集まってきた子どもたちが実に熱っぽい議論をしながら、「自分たちの学校が欲しい」と祈り願っていた創立前。生徒も教職員も一体となってすべてを作り上げていった草創期。石ころだらけのグラウンドを自らの手で整備、すべてが新鮮でいろいろな試みをしてきた高校1期生……。不思議なほど、生徒も教職員も情熱に満ちあふれていました。しかしその確信はいったいどこからやってきたものなのでしょうか。いったい何に由来するものなのでしょうか。

その確信を聖書は「わたしたちに与えられた聖霊によって」、「神の愛がわたしたちの心に注がれている」と記しています。「神の愛がわたしたちの心に注がれているから」こそ、自分の内から「情熱」が湧き出ることになります。それだけ「神の愛」というものは、私たちにとって「大きな贈り物」だと言えるのではないのでしょうか。

その情熱によって困難な壁を乗り越えた、それが清教学園なのでしょう。「小さい教会の容易に手の出せる問題ではなかった」にも関わらず、今こうして河内長野の地に建っている。そう考えると、清教学園はまさに「Amazing Grace」、「神からの大きな贈り物」だといってもいいのかもしれない。